

四つ葉のクローバー

karinomaki

四つ葉のクローバー

四つ葉のクローバーは、見つけた人が幸福になるという言い伝えがありますね。このことをもとに、本当の幸せの作り方を考えてみたいと思います。

お守り

神社のお守りや、自分でこれがお守りと決めたものを持っている人は多いと思います。四つ葉のクローバーを摘んでラミネートしたり、しおりにしたりしてお守りにしている人もいますね。そのことには大きな意味があると思います。お守りは気休めにすぎないと思うよりも、本当に守ってくれると思う方が素敵だと思います。しかし、最近私は、お守りとはほんの少しだけ心の距離を置いた方が、逆に効果的なのだと思うようになりました。執着しすぎないことが、逆にお守りの力を導くのです。それには深い理由があるのです。このことを哲学してみればすごく面白いのではないかと思い、この文章を書き始めました。そのことを書くために、まず私の昔の経験を書きたいと思います。

高校三年生

かなり昔の話になるのですが、私は高校三年生の時が、人生でいちばん苦しい時期でした。勉強が全く手につかなくなったのです。そんな時、クラスで校外学習に出かけました。たしかみんなで何か球技をしていたと思います。私は球技の合間に草の上に座っていたのですが、ふと脇を見ると、びっくりするほど大きな四つ葉のクローバーが生えていたのです。

私は、その四つ葉のクローバーを摘もうとしました。しかし、あまりにその葉が大きかったので、逆に摘むのがもったいなくなりました。結局私はその四つ葉をそのままにして帰ってしまいました。

それから数日して、私の心に風穴があく事件が起こりました。大切に思っていた人に、絶交されてしまったのです。その人を私は友人だと思っていたのですが、友人は私の過度の依存が我慢できなかったようです。私は友人をあまりに大きな支えにして生きていたので……。私はその時、人は人を支えにしてはいけないのだろうか真剣に考えました。今思えば、心が自立していて初めて、人は人と支えあえるのですが、その時の私にはわからなかったのです。私は四つ葉のクローバーを思い出しました。あの時摘んでおけばよかったと思いました。そうすれば、こんな悲しいことは起こらなかったのにと……。

お守りの力

ここで少し、お守りの力とは何かを考えてみたいと思います。カントの哲学の中で探してみたのですが、私達が生きるお守りは、カント哲学では「実践理性批判」の位置にあると思います。実践理性批判は、人間のしっかりした意志による、美しい生き方を書いています。この生き方ができれば、どろどろぐちゃぐちゃの感情からは守られるのではないかと思います。人に裏切られたと思って恨んだり、逆に人を傷つけることもなく、ある意味美しく生きられるのではないかと思います。

もし、この美しい生き方を、四つ葉のクローバーが守ってくれるとしたら・・・とても素敵なことです。信じる者は救われると言いますし、本当にそうかもしれません。

ただ、この先の話を聞いて下さい。私は、どろどろぐちゃぐちゃの気持ちのまま学校に行っていたのですが、その気持ちが大きなギフトを引き寄せたのです。それは、物ではありません。自分で生きていこうとする勇気でした。勉強は相変わらず手につかず、友達もいなくなり、ひとりぼっち。お守りも宝物もない。しかし、私は、あの時に見た、大きな四つ葉のクローバーを思い出しました。たくさんの三つ葉の中で、ひとりで大きく地面に生えていた、幸せの葉を・・・。それは、何も持たなかった私の、心のお守りであったのかもしれない。

実践理性批判

やがて、受験に失敗して浪人したあと、大学に入り、私はカントの実践理性批判を買いました。その本を読んで、私は思ったのです。実践理性批判は厳しい道徳という苦しみに支えられて立っていると。自分を厳しく律することができなければ、美しい生き方はできないのです。

私は美しい四つ葉になりたい……。四つ葉は私の実践理性批判だ。

もし、私が友達に頼り続け、自立できなかつたら、たくさんの三つ葉の中で安心して、四つ葉にはなれなかつたかもしれない。もし、四つ葉のクローバーを摘んでいたら、本当に守られていたかどうかと私は考えました。本当に守られるということは、四つ葉のクローバーを摘んで安心することではないのかもしれませんが。なぜなら、痛みの中から本当の守護力は生まれるのではないかと思うからです。カントの実践理性批判も苦しみの上に成り立っていると思うから。決して何かに守られて安心しきることなく、戦い続けることが、本当の強いお守りなのかもしれません。お守りとは心を強くする精神的なものなのですね。

心のお守り

私は四つ葉のクローバーを摘みませんでしたでしたが、心の中で、それをお守りにしました。友人に絶交されたあとに……。それは、痛いお守りでした。心を満たしてくれるものではなく、あの時摘んでおけばよかったと痛く思いたすお守り。しかし、痛みの中から、不思議な力がわきました。痛いから、しっかり立っていようと。そして、いつかあの四つ葉みたいに大きく幸せを築ける人間になろうと思ったのです。それは、覚悟のようなものでした。「痛くてもいい。しかし、痛みの中から本当の幸せがのびていくのだ」という。

絶対に守ってくれる力は魅力的です。しかし、四つ葉のクローバーを摘まなかったことが（お守りを心の中にとどめたことが）、私を強くし、自分の力で幸せを築ける人にしてくれたと思います。お守りは大切に持っても、あまり頼りきらず、強さを導くための支えにすればいいと思います。その姿勢が本当の守護力を引き寄せると思うのです。カントの実践理性批判は、美しさだけを追求するものではありません。厳しい道徳の上に成り立つ意志について書いたもので、カントの道徳はあまりに厳格すぎて守れないとも言われます。しかし、人に踏まれていく草の上で立派に立っていた、あの四つ葉を私は今も思い出します。そして思うのです。痛みを受け止めて、厳しい人生を生きてこそ、本当の幸せと出会えるのだと。

私の場合は四つ葉のクローバーを摘まなくてよかったと思います。心のお守りは、あの時のまま、永遠に心の中で咲いています。本当の幸せは、痛みの中にあるからきっと枯れないのです。四つ葉は、枯れない幸せをたくさんの人に届け続けてほしいと、心から願います。